

平成27年度産業建設常任委員会行政視察報告書

平成27年11月26日

1. 日 程 平成27年10月26日（月）～10月28日（水）
2. 視 察 先 島根県安来市 人口 40,632人（4月1日現在） 面積 420.93 km²
島根県雲南市 人口 40,646人（9月末現在） 面積 553.18 km²
3. 視 察 事 項 安来市 観光施設整備（観光交流プラザと安来節演芸館）の成果と課題について
雲南市 雲南市農商工連携協議会の設立の経緯及びプロジェクトの成果と課題について
4. 視 察 者 委 員 浅 野 一 明 委 員 長 関 龍 雄 副委員長
佐 藤 俊 雄 委 員 山 田 義 栄 委 員
樋 口 博 務 委 員 安 武 秀 敏 委 員
当 局 明 田 川 太 門 商工観光課課長補佐
随 行 吉 田 裕 之 議会事務局次長 計8名

安 来 市

（1）安来市の概要

安来市は島根県の東部、鳥取県との県境に位置し、東は米子市・南部町、南は日南町（以上鳥取県）・奥出雲町、西は松江市・雲南市に接している。市域は東西およそ22 km、南北およそ28 km で、面積は420.93 km²である。

南部は中国山地に連なる豊かな緑に覆われ、そこを源流として中海に注ぐ飯梨川・伯太川いいなしがわ はくたがわ全流域が市域に含まれる。下流域に形成された三角州には広大な耕地が広がり、上流域には豊かな森林と県東部の水瓶としての機能も果たす布部ダム・山佐ダムがある。

神代の昔、スサノオノミコトがこの地に来られ「吾が御心は安平（やす）けくなりぬ」といわれたことから「安来（やすぎ）」というようになったと伝えられている。安来節・ヤスキハガネで全国的、世界的に高い知名度を持つ。

（2）観光施設整備の成果と課題について

（ア）「観光交流プラザ アラエッサ♪YASUGI」

（i）施設の概要

安来市では、「出会う・集う・憩う」を演出する安来市の観光と情報発信の拠点施設とし

て、また、中心市街地再生計画の中核施設として、市の玄関口である JR 安来駅との合築^{がっちく}により、「観光交流プラザ アラエッサ **♪YASUGI**」を平成 20 年 4 月 1 日にオープンした。

施設は木造一部 2 階建て。床面積は 1 階 563.00 m²、2 階 142.10 m²の計 705.10 m²である。施設内部は、天井板を使用せずに小屋組を見せるデザインとなっており、構造的にも日本の伝統的な木組み工法を用い、耐震性の高い、ダイナミックで美しい大きな室内空間となっている。

事業費は、工事費及び JR への補償費等あわせて総額 685,101 千円。財源は起債（合併特例債）600,500 千円、一般財源 84,601 千円である。

（ii）事業内容・施設の利用状況

施設整備の方針として、①歴史や風土が肌で感じられる施設を目指す、②「我が郷土」の再発見の場となるよう、地域資源の紹介・展示の場とする、③「道の駅」的な地場の農産物や工芸品の展示・販売を行うとともに、情報発信機能を設ける、④駅前と一体的な広場を創出する、⑤空調や休憩スペースを効果的に配置し、「居心地の良い空間」づくりを目指す、⑥中心市街地と関連する施設運営を目指す、という 6 つの方針を掲げ、1 階には、多目的交流ゾーン、行政・観光案内コーナー（総合案内所）、特産品等販売コーナー、喫茶・軽食コーナー、銀行 A T M等を設け、2 階は一般の方の作品展示や企画展、作品展等美術館的活用や集会等にも利用できるギャラリーを設置している。

年間約 5 万 6 千人に利用されている本施設の管理運営は、物品販売を安来市観光協会が実施し、ギャラリーを安来市文化協会に一部事業委託を行っているが、施設全体の管理運営については指定管理者制度を導入せず、安来市の直営としている。

（イ）安来節演芸館

（i）施設の概要

安来節演芸館は、全国に誇るべき「民謡・安来節」の殿堂として、新生安来市まちづくり計画に位置づけを行っている南の観光交流拠点として「安来節演芸館」を整備し、安来節の普及振興と魅力あふれる観光地づくりを目的として、平成 18 年 1 月 20 日にオープンした。

施設は木造一部 RC 造 2 階建て、延床面積 2,171.42 m²である。敷地面積は 5,645.57 m²で、観光バス 6 台、一般車両 115 台分の駐車場を有する。施設建設の総事業費は約 975,000 千円で、財源は合併特例債 680,000 千円、安来節会館建設基金繰入金 187,000 千円、一般財源 77,000 千円、その他寄付などが 31,000 千円である。施設の設置当初から、指定管理者大新東株式会社により管理運営が行われている。

（ii）事業内容・施設の利用状況

観光客や地域住民に対して、安来節の常設講演のほか、舞台演劇、安来節保存会の定例行

事の開催や本場の安来節を鑑賞してもらうとともに、安来節に関係する唄、踊りの指導や講習会を行い、安来節の普及発展を図ること、また、レストランにおいて安来市が推進している「どじょう生産事業」と連携を図り、安来産どじょうを使用した「どじょう料理」を堪能してもらうことを施設の活用方針としている。

この方針の下、233 席を備えるホール・ステージでは日に 4 回（水曜日は定休日）の安来節の公演のほか、舞台演劇や、安来節の歴史と魅力を紹介する映像なども上映されている。また、安来節の歴史と変遷を映像やパネルで展示する展示室や、安来節関連商品、特産品の販売を行う売店も設置されており、100 席のレストランでは「安来どじょう」を利用した料理が主に提供されている。

入込客数は、開設の平成 18 年度は 131, 925 人であったが、翌平成 19 年度は 81, 549 人となり、その後 8 万人から 9 万人台で推移している。

（３）所感

両施設とも、観光施設として利用者数の増加がオープン当初からの課題であるが、駅に合築された観光交流プラザではＪＲとの協力も可能であるし、観光客のみならず市民の交流の場としての発展の余地があると思われる。また、安来節演芸館は、来館者数が年間 50 万人を超えるといわれる全国屈指の美術館である足立美術館の隣に立地しており、まだまだ多くの観光客を呼ぶことができる余地もある。

安来市では、安来節の明るさもあつてか、いずれの施設でも、市民活動や観光客への歴史や文化の紹介に楽しさが感じられた。観光の発展にとって楽しさは重要な要素であろう。加茂市においても、観光の発展のため安来市に負けない伝統と文化を、楽しく発信する工夫を重ねてゆくことが大切であると思われる。

雲 南 市

（１）雲南市の概要

雲南市は、島根県の東部に位置し、北部は出雲平野や宍道湖が広がる松江市、出雲市と接し、南部は中国山地が連なり、広島県に接している。市内各地には神話や伝説が残り、多くの遺跡や古墳が発掘されている。市の中央を縦断する斐伊川は、ヤマタノオロチ伝説でも知られ、古くから支流周辺の低地では農耕が営まれ、また、山間部では、たたら製鉄や炭焼きが盛んに行われてきた。

平成 16 年 11 月 1 日に、だいとうちょう 大東町、かもまち 加茂町、きすきちょう 木次町、みとやちょう 三刀屋町、よしだむら 吉田村、かけやまち 掛合町の 6 町村が合併し、雲南市としてスタートした。

（２）雲南市農商工連携協議会の設立の経緯及びプロジェクトの成果と課題について

（ア）雲南市農商工連携協議会設立の経緯

特産品の販路拡大のため雲南市認定商品を作るという検討もなされたが、その効果には疑問の声もあった。一方で、地元の状況の聞き取り調査では、加工食品会社と地元農家のつながりが薄いことが判明し、継続的なコーディネートが必要として、新たな協議会設立に向けた検討が開始された。

平成 20 年 12 月 8 日、商業者と農業者のニーズ把握を目的として市内の「素材」や「加工品」を集めた見本市を開催。70 人、50 団体の参加があり、市内の特産品を互いに再発見するとともに、参加者に対し協議会設立についての提案が行われ同意が得られた。

平成 21 年 2 月 20 日、「みんなでつくる！うんなんのほんもの！」を合言葉に、雲南市農商工連携協議会が設立され、会長に雲南市長、副会長に商工会長、JA 組合長が就任した。平成 27 年 6 月 23 日現在、農林漁業者 15 名、商工業者 54 名、その他 3 名の 72 の個人団体が参加している。

（イ）雲南市農商工連携協議会の概要及びプロジェクトの成果

商品開発のためにプロジェクトが設けられ、平成 21 年のスタート時には、特産品のにんにくと唐辛子（オロチの爪）を活かした①スパイスプロジェクト、おみやげ品の開発として②スイーツの杜プロジェクトが始動した。平成 23 年には新たに、③たまごプロジェクト、④さくらプロジェクト、⑤山の幸プロジェクトが追加された。

各プロジェクトでは様々な加工食品の開発や、飲食店を中心に料理の提案などが活発に行われており、加工食品は土産品としてだけでなく、大手スーパーとの連携や関西での展示会や催事への参加を通じて販路の拡大が行われている。更には、桜の植樹なども行い、市内の名所作りも行っている。

（ウ）今後の課題

参加者の固定化で、商品開発などもマンネリ化する部分があるため、参加者の拡大が課題である。また、現在は商工業者が先頭で引っ張っている感じが強く、農林漁業者との関係性が薄い。市内全体で盛り上げるためには生産者にも参加意識を高めてもらう必要がある。

（３）所感

市町村合併で新たに誕生した市で、互いに知らなかった特産品を持ち寄り、新たな商品開発を市民が中心となって行い、実際に数多くの商品を生み出している状況には、非常に活力が感じられた。地域を盛り上げようとする市民の協力が非常に良い形で現れており、地域活性化の成功例であると思う。加茂市にも特産品は数多くあり、同じような成功の道を開くことも可能であると感じられた。

雲南市の農商工連携プロジェクトの更なる発展に期待したい。